

Title	E・H・カー著 清水幾太郎訳 歴史とは何か
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.615(87)- 617(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0088
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0088">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0088</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が訳出されている。各論文それぞれに持味があつて示唆されることも多いが、何と云つても本書中の白眉は第四論文、すなわち本書編者バイプスのものである。読者はまずこの論文から読むことをおすすめする。

「ロシア・インテリゲンチアの歴史的生成」と題して、バイプスは、インテリゲンチアの生成を、ロシアの西欧化過程と結びつけて理解し、西欧化に二つあることを指摘する。一つは、西欧の文化的生活様式の受容であり、他は批判的哲学的合理主義態度である。前者は政治的選択を強いることはないが、後者は一定の拘束を要求する。そして後者の批判的旧インテリゲンチアは、現状の悪の原因をすべて資本主義のせいにしてきたのだが、今日では、その悪が産業生活に固有のものであることが明らかになってきた。資本主義・社会主義・共産主義のいかんを問わず、工業化は一律に著しい類似性を持ち、ソ連ではすべてを犠牲にしてひたむきに産業の成長に集中してきたことから、一切の害悪をますます熾烈化することになったのだ。そこで批判的旧

インテリゲンチアは戦間的から次第に逃避的な新インテリゲンチアになり、哲学的には共鳴できなくとも文化生活としては近代技術の発展にしたがうために自主・自律を求めるようになる。このことが全体主義傾向の中に自主的領域を拡げ、批判的インテリゲンチアの残存を可能にしている。その点でこの体制は深刻な矛盾をはらみ、一九五六年以後のイデオロギーの動揺はその現われとみることでできよう。バイプスは断じている。

その他、「ドクトル・ジバゴ」の英訳者へイワードは、エレンブルグを政治に敏感な追随者とし、だからこそ、彼の小説「雪解け」はソ連知識人の動向を示しているのだと指摘している。ソルスベリー「フルシチョフのソ連」と併読すればソ連作家の圧力がひたひたと感じられよう。またカリフォルニア大学マリア教授は、インテリゲンチアという奇妙なロシア語は、「疎外された知識人」以外の何ものでもないことを明快に分析している。ロシア語インテリゲンチアを好んで使う日本の知識人は、疎外されていることをみずから知っているのでもあろうか。などなど尽きせぬ話

題を提供してくれる。(時事通信社・昭和三七年三月刊・新書版・二〇〇頁・一〇〇円)

—加藤 寛—

笠 信太郎著 『花見酒の経済』

結局は自分のあたまでしか物はんがえられないというけれど、自分のあたまでかんがえるというところは、意外にむずかしい。たいしては既成の觀念に合わせたり、いわゆる世間並みの判断でごまかしてしまふことが多い。笠さんの本は、「もの見かた・考え方」以来、案外うっかりして気がつかないでいたことを、私たちに思い出してくれる。気がつかなかったというのは知らなかったのではない。他人の目で見たり、他人のあたまでかんがえていたからそうだったのであろう。

この本の主な中味は、すでに新聞紙上でたいていの人が読んで感心したものにはない。土地が投機の対象であり、土地のキアピタル・ゲインが信用膨脹の起爆の役をはたし

ている(第一章)、というのがいちばんあたらしい問題提起だ。日本の過当競争(第二章)ということも、笠さんによって、あらためてそうかとおもひ知らされたことだった。キアピタル・ゲインが物価騰貴をひきおこすことなら、だれでも知っている。過当競争とは独占的競争のことであつて、「供給がふえるほど価格が上がる」という過剰能力説につながるものであることは、経済理論をすこしよけいに勉強した者なら、これも知っていることだ。だから、現実になつた経済理論がないというのではない。正しい理論を選択できないでいたのである。

しかし、それには現実に対するすぐれた直覚が必要である。そして、すぐれた直覚は現実に対する、ある種の平衡感覚をもつことである。経済のなかにノーマルでどこがアブノーマルかを判断する基準のようなものが、あたまのなかになければならない。自分でかんがえるということは、まずこうした感覚を身につけていざできることなのだろう。いいわるいはべつとして、笠さんのものにはそうした感覚がにじみでている。ガルブレイスの

「ゆたかな社会」は、読者側が当然知るべくしてあまりにも知らなすぎたと痛感したから、センセイショナルになつたのであるが、これもガルブレイス教授の感覚の問題につながるのだろう。両方ともジャーナリストに縁があつたことは興味ふかい。

ただし、笠さんは日本生まれの経済学出ですよと説いておられるが、笠さんの平衡感覚を信用するかがきり、中山経済学や有沢経済学は、現れないほうがよろしいのである。

(朝日新聞社・四六判・二〇八頁・二〇〇円)

—大熊 一郎—

\* \* \*

E・H・カー著 清水幾太郎訳 『歴史とは何か』

本書は英国の現代史の大家である著者が、一九六一年の一月から三月にかけてケンブリッジ大学において行った連続講演の記録である。著者はその中で現代史の専門家にふさわしく「歴史とは何か」という本質的な問題を

極めて現代的問題意識と結びつけて説明している。「歴史は現在と過去との対話である。」

この言葉は本書において繰り返される著者の基本思想の一つである。そこには一方において過去の歴史をたえず現在という我々にとつて最も確実な地点から考察するという極めて主体的な、かつリアリスティックな立場が示されている。と同時に他方では我々のよつて立つ現在には、決して固定された、我々にとつて受動的なものではなく、逆にたえず未来に向つて開かれた地点であるが故に、そこにはひかえめではあるが「人間の可能性の漸次的発展」に対する信仰がもられているのである。このことを著者自身「歴史とは過去と現在との間の対話である」と前の講演で申し上げたのですが、むしろ歴史とは過去の諸事件と次第に現われて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであつたかと思ひます」と表現している。この意味で本書は単に歴史を研究するものにとつただけでなく、現在に生きるものすべてにとつて極めて重要な示唆を与えてくれる。我々は著者の基本思想の中に、良い意味でのイギリスの自由主義歴史学の伝統

をみると共に、著者独自の宏大にして柔軟な構想に圧倒されるのである。

さて本書の内容を極く簡単に紹介しておく。

一章 「歴史家と事実」 十九世紀の歴史家達が事実尊重の気風に圧倒されていたのに対し、二十世紀の歴史家の中からは歴史的事実とは歴史家が主体的にえらびだし再構成したものにすぎないという思想がうまれてくる。

著者は一面でこのような思想を承認するが、同時に事実そのものは客観的に過去に属しているものであって、一面だけを強調することは主観主義か客観主義に陥ることとする。問題はあれかこれかではなく「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きること知らぬ対話」なのである。

二章 「社会と個人」 社会が先か、個人が先かという問題は鶏と卵の問題と同じであり、社会の発達と個人の発達とは相互に制約し合う。この問題はさらに二つに区別されるのであり、その一は歴史家自身と社会の問題である。この問題で重要なことは歴史家の研

究に際しての立場を知ること、その立場の背後にある社会的歴史的背景を知ることである。第二の問題は実際の歴史における社会と個人の関係である。この点で著者が指摘するのは第一に歴史にとっては偉大な個人の働きが重要であると同時に、大衆も大切な役割を果たすこと、第二に個々の人間の意図とそれら人間の社会的行動の結果とはしばしばくいちがうものであるということである。

三章 「歴史と科学と道徳」 歴史は科学であるという命題の真の意味は、決していわゆる歴史法則の絶対化を信ずることとはならない。法則とは「更に進んだ研究および新しい理解に至る道を示すところの有効な仮説」以上の意味はもたない。それはマックス・ウェーバーのいうように現実理解の思想道具である。このような理解に立てば歴史における一般性と特殊性の関係についても、それが相互作用の関係にあることが判明する。さらに歴史家は未来の歴史の方向について予言しうるかの問題についても、それは一般性との関係ではありうると同時に、偶然の要素のいりこみうる特殊性を捨象せざるをえないという限

界が与えられている。さらに歴史を研究する場合には研究する主体のみ方、立場が、客体の観察の中に入りこむのである。これは社会科学の特殊性であるが、最近の物理学において同様のことがいわれていることに注目する必要がある。また主体の立場を強調するの余り、超越的な神や道徳等をもたらして歴史を裁くやり方には賛成しえない。勿論歴史の研究には研究主体の価値判断が必ず前提とされるが、その価値判断自身が歴史に制約されたものである。

四章 「歴史における因果関係」 歴史の研究は原因の研究であり、歴史家は解答の見込みのある限り「なぜ」と問い続けるのである。この場合我々はまず一つの事件についていろいろの原因をあげる。その上で諸原因のリストを秩序づけ、上下関係をつくる。ここで「歴史主義の貧困」の著者ポッターが行った決定論への批判をとりあげ、人間の行為が対象であるからこそ原因と結果が問題となるのである。行動の自由と決定論とは相互作用の関係にあると指摘する。ここに歴史の必然性の問題を解く鍵もあるのである。そしてまた歴史

における偶然性のもつ役割も理解しうる。偶然の中には歴史のコースを変えた偶然があるのであり、これを否定することは誤りである。しかし歴史の合理的解釈(因果関係)にとっては全くの偶然はいりこむ余地はない。何故なら歴史家は歴史的に有意な因果の連鎖だけを多数の因果関係の中から選びだすのであるから。

五章 「進歩としての歴史」 歴史を神秘的な観点からみることも、なげやりのに全て無意味であることもいずれも誤りである。著者はキリスト教の目的論的歴史観から十九世紀の現世的進歩への無条件の信仰への発展をみた上で、歴史の進歩の意味をとく。すなわち第一に進歩とは獲得された能力、技術の、世代から世代への伝達を通じて行われる。第二に進歩は無限の過程であり始めや終りはない。この点でキリスト教もマルクス主義も終末的な歴史観を主張する意味で問題を残すのである。大切なのは人間の可能性の漸次的発展を信ずることである。そして歴史の進歩と共に現在から過去をみる歴史家の眼もいよいよ進歩するのであり、唯一の絶対者は

変化である。このような立場で歴史における判断の基準を求めるとすれば、それは「普遍的妥当性を要求するような原理」ではなく、「最も役に立つもの」ということになる。この基準は「存在するものはすべて正しい」という見解に通じ、即席の判断をさげ、まだ起っていない事柄に照らして判断に訂正を加えることができるのである。

六章 「広がる地平線」 二十世紀中葉の現在には中世世界の崩壊以来の烈しい変化の時代である。第一に現代人は前例のない強さで自己を意識している。このような自己意識の発展を促進した人々に、ヘーゲル、マルクスという系列とフロイトをあげている。特にフロイトについては人間の行動の無意識の根源を明らかとすることにより理性の領域を拡大した点に注目している。ところで自己意識の発展は単に思想の面だけでなく社会体制についても計画的要素の増大のうちにみることができ。勿論理性の濫用も同時に指摘されなくてはならない。しかし地平線の広がりによって世界史の巨大な変化の起りつつある現在、大切なことは変化を歴史の前進的要素として

みること、そして変化の複雑な姿を理解するための案内人は理性であると確信することであり、英国内の保守主義に対しては「それでもーそれは動く。」というべきである。

以上の著者の思想に対し、我々は歴史の進歩と理性に対するひかえめではあるが、確固とした信念がいささか手放しのものであり、「存在するものは正しい」という主張と共に疑問としてとされる。問題はまさに主体的な理性の運用と進歩へのかかり方にあるのであり、現代の危機はこれに対する深刻な挑戦であり、これへの回答は単なる理性だけでなく全人的な疎外からの回復によってなされなくてはならない。(岩波新書・二五二頁、一五〇円) 一寺尾 誠一

宇野弘蔵著 『経済学方法論』

周知のごとく、戦後のわが国における「資本論」研究は他国に例をみないほどの進展を示し、近年においてはかかる研究から一歩出